

# こまざわ 経済通信

発行  
駒澤大学経済学部  
同窓会  
〒154-8525  
東京都世田谷区駒沢  
1-23-1

## 卒業おめでとう！

ご卒業おめでとうございます。

新たな令和の時代を迎えて初めての卒業生となられた皆さんと今日からともに歩んでいけますこと、我々駒澤大学卒業生一同にとりまして何よりの喜びです。

「無駄なことをたくさんしないと、新しいことは生まれてこない」---昨年ノーベル化学賞を受賞された吉野彰さんの言葉です。皆さんには、これから回り道や寄り道、いったんたち戻るようなこともあろうかも知れません。けれども、そのような無駄があっても、これまでにないことを生み出すことができる、この素敵な言葉を、新しい門出のお祝いとして同窓会から皆さんにお贈りします。

社会に出たばかりの時は、どんな人間でも、未熟な一人の新人です。しかしながら、自分には必ずできる、という信念をもって諦めずにチャレンジを継続していけば、新たな創造に繋がり、その結果、皆さんも自然と人物として評価されていきます。そして、より大切なことは、将来成し遂げて大成してから、その姿勢を決して忘れないことです。

卒業生が集う同窓会では、先輩から様々な人生訓を得、自らを涵養し、友人との交流も深め、後輩を育てていくことができます。

皆さんには同窓会に入って、未来に向けて一緒に夢を語りあいながら、日本そして国際社会に貢献していただきたいと心より願っています。



経済学部同窓会会長  
大場やすのぶ会長

## 2020年の人事について

2020年3月に3名の先生が定年退職を迎えられます。また、新年度には3名の先生が着任します。ここ数年、経済学部は変化の時を迎えています。

### 定年退職(2020年3月)

小栗 崇資 教授(財務会計論) 荒木 勝啓 教授(応用ミクロ経済学)  
吉田 敬一 教授(中小企業論)

### 新任(2020年4月～)

吉村 純一 教授(マーケティング) 李 エン 講師(会計情報論)  
山田 雅俊 教授(企業経営学)

## 経済学部同窓会主催 「経済学部創立70周年を祝う会」開催される

2019年12月1日(日)、経済学部同窓会は経済学部創立70周年の節目にあたり、全国の卒業生、経済学部教員、名誉教授が一堂に会して親睦を深め、70年の歩みを振り返り、経済学部と同窓会の更なる発展をはかる目的で、「70周年を祝う会」を深沢キャンパスで開催した。

「70周年を祝う会」は2部構成で、1部が記念式典と講演(アカデミーホール)、2部が懇親パーティー(洋館ホール)であった。

式典では主催者を代表して大場やすのぶ経済学部同窓会長の挨拶に続き、長谷部八朗学長と萩野 虔一駒澤大学同窓会会長が祝辞を述べられた。

講演では瀬戸岡紘(駒澤大学名誉教授)が「1919年から1929年へ、さらに1939年への道…もしや いま あの道をふたたび」と題して講演した。

講演後の懇親パーティーでは、全国から駆けつけた同窓生の方々の近況報告や懇談を楽しみ、最後は全員でスクラムを組んでの校歌を斉唱して閉幕した。

司会 出 完爾



挨拶する 大場経済学部同窓会長

### 大場経済学部同窓会長

「北海道、徳島県など遠方からの同窓生の参加を力強く思う。経済学部は今後ともに人間性豊かなプロフェッショナルを輩出し、社会に貢献し続ける事を願う。」

### 長谷部学長

「商経学部創立の昭和24年は駒澤大学が新制大学としてスタートした年であり、経済学部は大学と共に歩んだ歴史がある。70周年を機に知恵と英知で更なる発展を望む。」

司会 出 完爾



祝辞を述べられる 長谷部学長

司会 出 完爾



祝辞を述べられる 萩野同窓会会長

### 萩野同窓会会長

「同窓会の維持・発展には現状に疑問を持ち打開しようとする力と先見性が必要と思う。是非、経済学部同窓会と地域同窓会に関心を持って頂きたい。」

瀬戸岡先生は講演で次のように述べられた。

国民のなかに 不満・不服・不安が増長する。そこで指導者たちは難局打開の策を講じる。だが、多くは成功しない。「世界の不均質性、世界経済の不均等性」の悪循環のなかで成すすべがなくなる。そこで最後の手段として、国内矛盾の対外転嫁として仮想敵国を刺激して自国民に脅威を感じさせ、戦争への路線を容認させ、自国民の相応の支持を得られたところで本格的に戦争へ突入する。

「すべての戦争は 国内矛盾の対外転嫁として勃発する」それを防ぐ手段としては小さな矛盾を見逃さないこと、そのため小さな事をコツコツと積み重ねて行う事であると熱弁をふるわれた。



瀬戸岡先生は講演で「考え方が近いほど激しく争う」など、自身の体験を交えた展開に興味深く拝聴させて頂いた。また、戦争の背景、特に歴史上の事件、その時代の社会状況などを独自の視点で解説して頂きました。

現在の日本に目を移して社会状況を観ると、世帯所得の低下、地域包括ケアや子供食堂などに見られる中間団体への依存、政治への失望と右傾化はいつか来た道にそっくりに思える。

昨年暮れに来日したフランスの経済学者ジャック・アタリ氏は今の世界状況を「20世紀初頭に近い」と指摘した。また、井出英策 慶応義塾大学教授は「不気味な足音が聞こえる様だ。国内ではあいちトリエンナーレ問題やポピュリズムを旗印とする政党の躍進がメディアをにぎわしている。国外でも輸出規制をめぐって日韓が対立し、米中の貿易摩擦が為替や株価を乱高下させた。付度やメディアへの圧力といった現政権への不信がファシズムへの懸念を強めてきたが内外の情勢はそれに拍車をかけつつある。」と警告を発している。さらに政治不信と社会の分断が進み、深刻な経済ショックと、その機に乗じ扇動的な指導者の出現が重なれば、破滅的な世界が待っていることが容易に想像できる。

この様な環境下での瀬戸岡先生講演は、私たちに「このまま老いていっていいのか」と問いを投げかけてくれた。

1919年当時最も民主的な憲法といわれたワイマール憲法をもつ共和制国家は、旧王族や貴族の政治的影響力が縮小し、かわりに実業界の実力者や、知識層、労働者運動の指導者など、市民層出身者が多く政界入りした。しかし、1929年、アメリカの「暗黒の木曜日」に端を発した世界恐慌によって、ドイツでも大量失業やハイパーインフレが深刻化。共和国政府に対する国民の不満は頂点に達していた。ヒンデンブルク大統領および国民は「目先の政策」に賛同し、民主主義的なワイマール憲法の理念とそれに基づいた制度を守り抜く意思に欠けていたことが独裁者を出現させた。そのことを私たちは忘れてはならないと思う。責任世代として「あの時にやっておけば良かった」と悔やむことのなきようにしっかりと社会を観て行くことが責務ではないだろうか。



記念講演の瀬戸岡紘 駒澤大学名誉教授





## 経済学部創立70周年記念シンポジウムに参加して

同窓会役員 櫻井 等

2019年11月23日(日)、駒沢キャンパス記念講堂で経済学部70周年記念シンポジウム「日本経済と金融の将来像」が開催され、雨の中およそ800名が参加した。

代田 純 教授(駒澤大学経済学部)の司会のことばではじまり、講演はトップバッターの 井上 智洋 准教授(駒澤大学経済学部)が「日本経済と金融における人工知能の活用」と題して講演し、続いて 岩下 直行 教授(京都大学)が「フィンテックの現状と未来」、中村 晃一 氏(楽天ペイメント株式会社代表取締役社長)が「楽天の考えるキャッシュレスのカタチ」、中島 真志 教授(麗澤大学)が「ビットコイン・バブルの崩壊とデジタル通貨の可能性」についてそれぞれ講演した。

講演後には 深見 泰孝 准教授(駒澤大学経済学部)のコメント、会場からの質疑にパネリストが丁寧に応答した。会場はメモとる人などで熱気に満ちていた。



～感じたままに～

シンポジウムの翌日に『こまざわ経済通信』に感想を載せたいのでお願いします」とメッセージが届いた。私は長らく製造業に携わって金融については門外漢から返事を躊躇したが、「是非に!」と云うことで私なりに感じた事を書くことにした。

内閣府が推進する「Society 5.0」の実現は、IoT(Internet of Things)と人工知能(AI)により、今までにない新たな価値を生み出し、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題の克服を目指すステップと位置付けている。

「人工知能の活用」「フィンテック」「キャッシュレス」「デジタル通貨」の展開は全てが日本経済の課題である生産性の向上に繋がってくる。また、日本の生産性はIMFのデータによると先進国39か国中23番目で、G7では最下位である。加えて、人口減少幅はG7中で最も大きく、生産性を上げなければGDP総額は縮小し、地盤沈下する。その様な環境下で象徴的な金融に的を絞っての各先生方のご講演は日本の金融が抱える課題克服に向けて避けて通れないテーマであり、示唆に富んだものだった。

米オラクルと米フューチャーワークプレイス社が2019年7月2日～8月9日にネット上で実施した調査によると職場でのAIの利用率は高度IT(情報技術)人材が豊富なインドが78%で1位、中国が77%で2位であるのに対して、日本は33%と日本がAIの利用の分野でもインド、中国から大きく遅れていることが確認されている。また、総務省が、AIの導入について企業に尋ねた回答として、「現在導入されていなく、今後も計画がない」と答えた企業が63.2%、次いで「わからない」が26.3%であった。(総務省平成28年版「情報通信白書」)

このような環境下で楽天の「ノエビアスタジアム神戸」「楽天パーク宮城」の飲食や購入商品など入場券を含め原則現金NGの取り組みは、日常生活でキャッシュレスのリテラシーを向上させ、顧客が不安なくキャッシュレスを利用し、待ち時間の減少など利便性の向上を感じ、加えて楽天自身が大きく業務の効率を向上させ、新たな顧客サービスに取り組んだ事例は素晴らしいと感じた。課題は少なくないが今後の楽天の展開に大いに期待したい。





## 研究室訪問シリーズ



北條 雅一  
(教授、教育経済論  
担当、2018年着任)

同窓会の皆様には平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

教育経済論の担当者として、2018年4月に経済学部経済学科に着任いたしました。縁あって前任校から駒澤大学に移り2年が過ぎようとしておりますが、種月館(3号館)の完成した活気あふれるキャンパス、緑豊かで落ち着いた駒沢オリンピック公園を一望できる研究室、個性豊かな学生、そしていつも暖かく接して下さる先生方・事務の皆様という非常に恵まれた環境で、日々充実した教育・研究活動をおこなうことができいております。

学部での担当授業について簡単に紹介させていただきます。前期の「教育経済論 a」では、教育の需要側、すなわち教育を受ける側に焦点を当て、人々はどのような意思決定に基づいて教育の需要量を決定するのか、意思決定を左右する教育の収益率とは何か、教育費はどのように負担されているのか、学校選択制度は教育の需要側に何をもたらすのか、といった問いに対して、経済学的な視点から解説する講義を行っています。

後期の「教育経済論 b」では、教育の供給側、すなわち学校や政府の側に焦点を当て、生徒の学力を規定する要因は何か、少人数学級や習熟度別授業など学校での取り組みには効果があるのか、教員の質を測り、高めるにはどのような方法が有効であるか、近年その重要性が指摘されている社会情動的スキルとは何か、といった問いを取り上げながら、現代の日本の教育格差を解消するために有効な教育政策について経済学的な観点から解説をおこなっています。

教育には、それを受ける側にとっては投資的な側面があります。また、経済学的に見れば公共財的な側面があるため、その供給には政府の関与が不可欠となります。そして教育は、人的資本形成の重要な一部分を占めているため、人々の所得稼得能力を左右し、経済全体の成長・発展に重要な役割を果たすと考えられています。また、所得格差の拡大や固定化にも教育は密接に関わっています。こうした背景から、近年では教育経済学に対する注目が高まっており、数多くの学生が授業を履修しています。

最後に、私自身の研究活動について紹介させていただきます。近年、国内でもEBPM(科学的根拠に基づく政策立案)が重視されるようになりました。教育政策も例外ではなく、科学的・合理的な根拠に基づいた政策立案が求められています。私の研究は、教育分野における経済学的な視点からの実証分析に基づいて、教育政策の評価・立案に資する科学的根拠を提示することを目的としています。現在は、格差の拡大・固定化の進展を念頭に置きつつ、経済的に恵まれない環境にある子どもに対して有効な教育政策を模索する研究を継続しています。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。





ゼ ミ 紹 介  
森 田 ゼ ミ

森 田 佳 宏 (教授、会計監査論担当、2001年就任)

私の専門は監査論であるが、公認会計士を目指す学生は別として、一般の学生にはとりあえずの学習対象として会計学のほうがなじみやすいようであり、また会計監査は一般的に財務会計を対象とするものであるから、ゼミでは財務会計の知識を深めるため、グループに分かれて様々な書物やインターネットからの情報を集約してレジュメにまとめ、報告する形をとっている。会計監査については私からプリントを配布し、練習問題を交えながら解説している。報告者によってレジュメのでき具合が違い、よく調べているものから少し足りないものまでいろいろであるため、報告内容が不足している場合には私が補足説明をすることになるのであるが、つい熱が入って延々と私の会計話が続くこともしばしばで、学生からは先生の話が長すぎて眠くなるといわれることもある。私としては学生に理解してほしい一心で情熱を傾けているつもりではあるのだが、なかなか学生の興味を惹きつけることは難しい。会計学の問題も、マルバツのクイズ形式にするとウケがいい。あまり大きな声ではいえないが、以前は私が好きな食べ物やおもちゃなどの話で盛り上がり、気がつくときゼミの時間が終わりに近づいていることもたまにあった。会計学のゼミであるから会計学の勉学を極めることが筋なのは当然ではあるが、学生の興味はそれだけではないらしく、卒業のときに、ゼミでは先生の雑談が一番よかったといわれることもよくあった。最近では仕事で時間に追われていることが多く、ゼミでは雑談ができていない。雑談のネタを得るには少しばかりのゆとりも必要なのである。

現在、日本監査研究学会の理事を務めていることもあり、去年は本学で学会の東日本部会を開催することになった。先生方をご存知のとおりだが、学会の開催は学生の手を借りなければ難しいことが多い。私もゼミの3年生に手伝いを依頼した。学会は当該学問分野の最先端の研究が披露される場であるから、そうした場の雰囲気を知っておくことも学生にとって悪いことではないだろうという思いもあった。参加者は監査論や会計学の研究者と公認会計士である。学生には事前のプログラムの発送作業から、当日の会場案内、机やマイクスタンドなどの運搬、受付、パワーポイントの準備、飲み物や昼食の提供、報告のタイムキーパーやマイクの受け渡しなどを、係を決めて担当してもらった。当日は100名を超える参加があったが、学生は割り当てられた仕事を本当に的確にこなしてくれた。堅い学会の雰囲気の中でもきちんと対応する学生の姿には、頼もしささえ感じたほどである。アルバイトによって仕事の要領を会得していることも大きいと思うが、普段のゼミでは学生の一面にしか接していないことを痛感した。この2月には4年生と東京証券取引所の見学に行くことになっている。見学後はきっと飲み会になるだろう。また学生のいろいろな一面が見られることが楽しみである。



## 第5回学生シンポジウムを開催しました

経済学部3年 坂田 弘 京 (2019年度 経済学部ゼミナール連合代表)

2019年11月10日(日)に経済学部ゼミナール連合主催「第5回学生シンポジウム」が開催されました。経済学部同窓会をはじめ教職員の皆さまからは多くのご支援とご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

学生シンポジウムは、複雑化する現代社会を多角的な視点から捉え直すため、所属ゼミを越えた研究交流をおこなう場です。本年度は20ゼミから47チームのエントリーがおこなわれ、総勢200名を超える学生が日ごろの研究成果を発表し、学びを深めることができました。経済学部のほか法学部、経営学部などからも多数の参加が得られました。第5回目をむかえ総合大学としての学習環境をこれまで以上にいかした全学的イベントに発展しつつあることを嬉しく思います。

私たち運営委員会では、開催準備期間として前年度の引き継ぎから約1年間をかけて取り組んできました。とくに研究交流が深まるような工夫や改善はどうあるべきか検討作業を積みかさねましたが、この作業は想像以上に難しいものでした。また、経済学部創立70周年記念事業の一環として、日中韓国際シンポジウム「激動期東アジアの政治経済学」を併催することができました。現役学生や同窓生など多数の参加者が熱心に聞き入る姿が印象的でした。経済学部の学生による司会進行のもと中国、韓国から招いた専門家の講演、さらに経済学部教員がコメントや通訳を行うなど、東アジアの未来をともに考える時機にかなった国際シンポジウムになりました。

運営委員会では学生シンポジウム、国際シンポジウムの円滑な進行のため、スタッフの配置や全体のスケジュール調整に注意を払いました。運営上の細かな技術的問題はありましたが、参加者からはたいへん有意義な時間だったとご感想を頂くことができました。また、運営委員へのねぎらいのメッセージを届けてくれた方もいました。わたしたち運営委員もようやく緊張感から解放され、胸をなで下ろしているところです。何事においてもより良いものを形づくるためには、つねに改善策の検討と実行を繰り返すことが重要だということを再認識する機会になりました。今後も学生シンポジウムの発展に努めてまいりますので、引き続きご支援とご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。





# 中原章吉先生を悼む

名誉教授中原章吉先生が2019年8月19日に逝去されました。経済学部での教育、研究への長年にわたるご尽力に深謝し、心よりお悔やみ申し上げます。

先生は1956年早稲田大学大学院を卒業後、都立高校教諭、広島商科大学講師を経て1967年(昭和42年)経済学部に着任され、2001年(平成13年)退職まで34年間勤務されました。本学では管理会計論を担当され、熱心な指導で研究者、会計士、税理士、国税専門官、企業経営者、商業科教員など多くの専門職業人を育成され、本学退職後は嘉悦大学でも教壇に立たれました。

研究面では管理会計学を中心に地道な努力を重ねられ、大きな業績をあげておられます。著書には『企業付加価値計算書の研究』(白桃書房、1989年)、『経営財務と管理会計』(白桃書房、1989年)等があります。

本紙第3号(1995年12月)の特集「思い出に残る卒業生」に、先生は「各分野で活躍」というタイトルで寄稿されておられます。(名誉教授 友松憲彦)

## 同窓会事務局からのお知らせ

### \* 同窓会組織の強化にご協力ください

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたらご紹介ください。未加入の方に事務局から入会案内をお送りします。

### \* 「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実のため原稿を募集しています。積極的なご投稿をお願いいたします。

- ・ 論 題：自由
- ・ 字 数：800字以内
- ・ 送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局(下記)  
原稿の採否は事務局にご一任ください。

### \* 役員を募集しています

ボランティアで同窓会の仕事をしていただける方を募集しています。

軽い仕事なのでご負担になることはありません。仲間と楽しみながら、同窓会と経済学部の発展ために貢献できます。

有志の方は事務局までご連絡ください。

### \* facebookの公開グループを立ち上げました

経済学部同窓会の公開グループ(<https://www.facebook.com/groups/komakei.obog/>)を立ち上げました。同窓生の情報発信や情報交換の場としてご活用ください。

経済学部同窓会事務局(経済学部事務室内)

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

電話：03-3418-9343